

涙香、「新青年」、乱歩

2009年10月3日

「新青年」と江戸川乱歩

「新青年」

大正9年(1920)1月号 → 昭和25年(1950)7月号

年度別作品掲載冊数

小説(合作を除く)

随筆・評論(アンケートを含む)

大正12年(1923)	3	1
大正13年(1924)	2	0
大正14年(1925)	7	4
大正15年(1926)	5	5
昭和2年(1927)	3	3
昭和3年(1928)	3	2
昭和4年(1929)	2	3
昭和5年(1930)	1	0
昭和6年(1931)	0	2
昭和7年(1932)	0	2
昭和8年(1933)	2	1
昭和9年(1934)	1	4
昭和10年(1935)	0	3
昭和11年(1936)	0	2
昭和12年(1937)	0	3
昭和13年(1938)	0	0
昭和14年(1939)	0	0
昭和15年(1940)	0	0
昭和16年(1941)	0	0
昭和17年(1942)	0	0
昭和18年(1943)	0	1
昭和19年(1944)	0	0
昭和20年(1945)	0	0
昭和21年(1946)	0	1
昭和22年(1947)	0	0
昭和23年(1948)	0	0
昭和24年(1949)	0	3
昭和25年(1950)	0	7

「探偵小説三十年」から『探偵小説四十年』へ

「探偵小説三十年」	「新青年」	昭和24年(1949)10月号 → 25年(1950)7月号	10回
「探偵小説三十年」	「宝石」	昭和26年(1951)3月号 → 31年(1956)1月号	52回
『探偵小説三十年』	岩谷書店	昭和29年(1954)11月	*「昭和八年」まで
「探偵小説三十五年」	「宝石」	昭和31年(1956)4月号 → 35年(1960)6月号	49回
『探偵小説四十年』	桃源社	昭和36年(1961)7月	*「昭和三十二年以降」まで
	光文社	平成18年(2006)1月、2月	全集第28巻、第29巻

『探偵小説四十年』の成立

「解題」新保博久

江戸川乱歩全集第28巻『探偵小説四十年（上）』（光文社文庫）から引用。

【探偵小説四十年（上）】

本書の成立過程はたいへん複雑である。

「新青年」（博友社〔初〕）昭和二十四（一九四九）年十月から連載された「探偵小説三十年」は、戦前発表した「探偵小説十年」（昭和七年五月、本全集第24巻所収）、「探偵小説十五年」（同十三年九月～十四年八月、本全集第25巻）などをも併呑する形で、いわば自身の作家的回顧の決定版とする意図があったことは、本文の「はしがき」からもうかがわれる。戦後解体される以前の博文館時代からの初代編集長・森下雨村の「探偵作家思ひ出話」の三回連載のあとを受けての登板だったが、いずれ横溝正史、延原謙、水谷準と順次登場させて、凋落の兆しいちじるしかった「新青年」としては、せめて往年の威光をしのばせたかったのかもしれない。「探偵小説三十年」は「少くとも一年はつゞく予定」と編輯後記にあるが、その一年に満たない昭和二十五年七月で掲載誌の余命が尽きた。「新青年」掲載の十回分には、「処女作を書くまで」「処女作発表まで(2)～(4)」「余技時代」「職業作家を決意」「最初の二ヶ年(1)～(4)」と中見出しがある。

並行して乱歩は「宝石」（岩谷書店 昭和三十一年七月より宝石社〔初〕）に、『幻影城』正統の基幹部分となった「幻影城通信」を連載中であつたが、昭和二十六年一月号の「クリスティーに脱帽」を最後に、翌二月号の休載を挟んで三月号から「探偵小説三十年」の継続（連載回数は再び第一回から）に替えている。そのさい次のような「はしがき」が付されていた（〔略〕）。

「はしがき」

本号から「幻影城通信」を暫く休んで、私の探偵作家としての思出話を連載する。これは「新青年」昭和二十四年十月号から二十五年七月最終号まで、十回連載したものの続篇である。十回もつづいたけれど、無駄話入りなので、私の処女作発表以来二年ほどのことを書いたばかりで中絶したもの。諸方から「あのつづきを書くように」と勧められるし、「幻影城」の英米探偵小説読後感にも少々あきたので、しばらく思出話の方を書くことにした。しかし今後も、英米の作品について、何か書きたいことがあれば、この稿の終りに、小活字で書添えることにする。「新青年」の思出話は、まだ私の大阪在住時代、〔略〕専門の探偵作家となることを決意したばかりの、出発期のお話である。

「新青年」の「探偵小説三十年」

- | | |
|------|--|
| 第1回 | 処女作を書くまで はしがき／涙香心酔／ポーとドイルの発見 |
| 第2回 | 処女作発表まで(2) ポーとドイルの発見（承前）／手製本「奇譚」／最初の密室小説／アメリカ渡航の夢／谷崎潤一郎とドストエフスキー |
| 第3回 | 処女作発表まで(3) 智的小説刊行会／「新青年」の盛観／馬場孤蝶氏に原稿を送る |
| 第4回 | 処女作発表まで(4) 馬場孤蝶氏に原稿を送る／森下雨村氏に原稿を送る |
| 第5回 | 余技時代 二年間に五篇 |
| 第6回 | 職業作家を決意 私を刺戟した文章／「D坂」と「心理試験」 |
| 第7回 | 最初の二ヶ年(1) 大正十四年の主な出来事／大正十四年発表の作品／名古屋と東京への旅／甲賀三郎君／牧逸馬（林不忘）君 |
| 第8回 | 最初の二ヶ年(2) 牧逸馬（林不忘）君（承前）／宇野浩二氏 |
| 第9回 | 最初の二ヶ年(3) 宇野浩二氏（承前）／野村胡堂氏と写真報知／探偵趣味の会 |
| 第10回 | 最初の二ヶ年(4) 探偵趣味の会（承前） |

『探偵小説四十年』に記された大正14年の事実誤認

名古屋と東京への旅 名古屋駅の待合室で盗難に遭う → 大正15年1月
牧逸馬（林不忘） 牧逸馬が「D坂の殺人事件」を英訳 → 「心理試験」
探偵趣味の会 横溝正史と4月11日に初めて会う → 二回目

『探偵小説三十年』草稿と『探偵小説四十年』の決定稿

「解題」新保博久 江戸川乱歩全集第28巻『探偵小説四十年（上）』（光文社文庫）から引用。
原稿は連載のうち相当量が立教大学図書館に預託されている（〔略〕）が、とくに興味深いのは「24年7月3日稿」と表書きされた四百字詰め五十五枚に及ぶもので、連載の冒頭四回分に相当する。とくに前半は思い出すままに書き連ねられたのが掲載版では時系列に再構成されているから、むしろ草稿（〔草〕）と呼ぶべきだろう（実際、掲載版の原稿として第四回分が別に現存している）。この草稿にしか見られない貴重な情報も含まれている。

草稿

私が探偵小説に心酔するに至った経路〔抹消して「涙香心酔」〕

私の探偵趣味は「絵探し」からはじまる。五六才の頃、名古屋の私の家に、母の弟の二十にもならぬ若い小父さんが同居してゐて、その人が毎晩、私の爲に石磐に絵を描いて見せてくれるのだが、小父さんは好んで「絵探し」の絵を描き、私にその謎をとかせたものである。枯枝などが交錯してゐるのを、じつと眺めてみると、そこに大きな人の顔が隠れてゐたりする。この秘密の発見が、私をギョツとさせ、同時に狂喜せしめた。その感じは、後年ドイルや、殊にチエスタトンを読んだ時の驚きと喜びに、どこか似たところがあつた。少年の頃「絵探し」を愛した人は多いであらうが、私は恐らく人一倍それに夢中になつたのだと思ふ。問答による謎々や、組み合わせ絵（ジググソウ）や、迷路の図を鉛筆で辿る遊びや、後年のクロスワードなどよりも、私にはこの「絵探し」が、何気なき風景画の中から、ポーズと浮かび上つて来る巨人の顔の魅力が、最も恐ろしく、面白かつた。

決定稿

涙香心酔

明治三十二、三年のころ（私は六、七歳であつた。生れたのは明治二十七年十月、三重県名張町。本籍は同県津市にある）。父は名古屋商業会議所の法律の方の嘱託として毎日通勤していたが、やはり宴会などが多かつたのであろう、父の留守の秋の夜長を、祖母と母とが、針仕事にも飽きて、茶の間の石油ランプの下で、てんでに小説本を読んでいるようなことがよくあつた。そのころは貸本屋の全盛時代で、祖母はそこから借り出してきた講談本のお家騒動か何かを、母は涙香の探偵ものを好んで読んだ（私は母の十八歳のときに生れたので、そのころ母はまだ二十三、四歳であつた）。私は二人が読書しているそばに寝ころがって、涙香本の、あの怖いような挿絵をのぞいたり、その絵の簡単な説明を聞かせてもらつたりしたものである。しかし、そのころの私には、まだ探偵小説の面白味などはわからなかつた。母も幼い私に探偵ものの筋を聞かせてくれたわけではない。

私が探偵小説の面白味を初めて味わつたのは小学三年生のときであつたと思う。算えて見ると、日露戦争の直前、明治三十六年に当る。巖谷小波山人の世界お伽噺の大きな活字に夢中になっているところで、私はまだ新聞を読む力もなかつたが、生来小説好きの母は新聞小説を欠かさず読んでいて、私は毎日その話を聞かせてもらうのが一つの楽しみであつた。

そのころ、大阪毎日新聞に菊池幽芳訳の「秘中の秘」が連載され、これが非常にサスペンスのあるミステリ小説で、母の好みにも叶い、私は毎日その挿絵を見ながら、母の話を聞くのを、こよなき喜びとしていた。

探偵小説の定義

「探偵小説の定義と類別」江戸川乱歩（江戸川乱歩全集第26巻『幻影城』）

探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である。

（1）先ず、そこには小説の全体を貫くような秘密がなければならない。犯人が誰かという秘密でもよい。犯罪手段の秘密でもよい。或は又犯罪動機の秘密でもよい。英米では近年「動機」を探す探偵小説というものが色々書かれている。更らに一歩進んで「被害者」を探す小説さえも案出された。これらは犯罪に関する秘密であるが、その秘密は犯罪などには少しも関係ないものであっても無論差支ない。原則としては何らかの謎さえあればよいのである。

「探偵小説」→「推理小説」厚木淳（日本大百科全書）

このジャンルの文学作品の総称としては、推理小説 detective story とミステリー mystery ということばが現在使われているが、ここでは同義語として扱う。推理小説の定義としては、江戸川乱歩の「主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれていく経路のおもしろさを主眼とする文学」というのが代表的である。乱歩は、おもしろさの条件として、(1) 発端の不可解性、(2) 過程のサスペンス、(3) 結末の意外性、の三つをあげている。すなわち乱歩の定義の対象とされる推理小説とは、トリック本位のいわゆる本格推理小説のことである。しかし現在の推理小説は、本格推理小説以外にも、スパイ・スリラーやハードボイルドなど多種多様なミステリーを包含しており、広義の推理小説を簡潔に定義することは事実上不可能といえよう。

江戸川乱歩の戦後

昭和20年（1945）	11月、疎開先の福島県から池袋に帰る。五十一歳。
昭和21年（1946）	1月、前年末から探偵雑誌「江戸川乱歩・ミステリー・ブック」を発行する計画を進めていたが、頓挫。2月、『幻の女』を読む。3月に「ロック」、4月に「宝石」が創刊される。戦前作品の再刊が始まる。
昭和22年（1947）	6月、探偵作家クラブ結成。11月、関西方面へ「探偵小説行脚」の講演旅行。
昭和23年（1948）	8月、映画「一寸法師」公開。
昭和24年（1949）	1月、「青銅の魔人」の連載を開始し、創作を再開。10月、「新青年」で「探偵小説三十年」の連載を開始。
昭和25年（1950）	3月、少年もの以外の戦後第一作「断崖」を発表。7月、「新青年」が終刊。
昭和26年（1951）	1月、長篇の戦後第一作「三角館の恐怖」の連載を開始。3月、「宝石」で「探偵小説三十年」の連載を開始。5月、『幻影城』を出版。
昭和27年（1952）	3月、『幻影城』で探偵作家クラブ賞を受賞。9月、生地の名張を訪れ、初めて生家跡を知る。

戦後の長篇探偵小説

横溝正史	本陣殺人事件 「宝石」昭和21年4月号 → 12月号
	蝶々殺人事件 「ロック」昭和21年5月号 → 22年4月号
	獄門島 「宝石」昭和22年1月号 → 23年10月号
	八つ墓村 「新青年」昭和24年3月号 → 25年3月号 / 「宝石」25年11月号 → 26年1月号
高木彬光	刺青殺人事件 岩谷書店 昭和23年5月
坂口安吾	不連続殺人事件 「日本小説」昭和22年9月号 → 23年8月号